

旅人
福寿草

麻生路郎

麻生葎乃

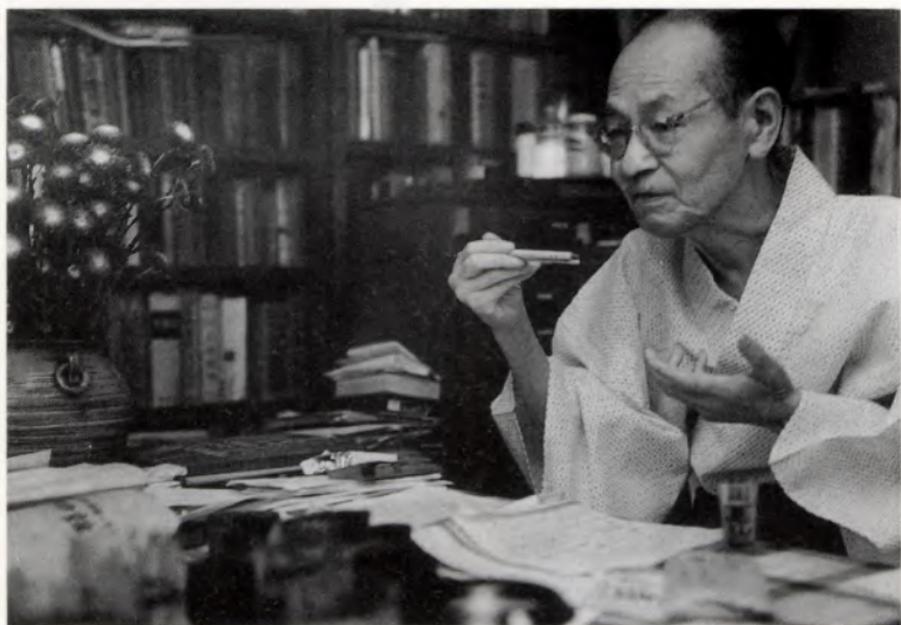
万代池公園を散歩▶

石切ヘルスセンターで▼



74回誕生日を自宅で祝う夫妻





麻生路郎・葎乃夫妻（昭和18年・奈良）



「ふるくとも僕には仁義礼昌言」

「川柳塔」八〇〇号記念出版

旅人
福寿草

夫婦句集

川柳塔社編

御 挨拶

大正十三年二月、我等の柳祖、麻生路郎・葎乃ご夫妻が、一大決心のもとに、創刊された『川柳雑誌』第一号から数えて、平成六年一月号を以て、八〇〇号の誌寿を迎えることになった。同人雑誌と言えば、三号雑誌と言われる永続性のないものであるが、今日に至るまでの基礎を築かれた両先生の御努力の程は、涙なくしては語れない。

はじめ同人制で出発し、途中、師弟制に変更し、昭和八年、川柳作家のブ口を宣言され、愈々川柳の社会化運動に邁進され、葎乃奥さんは、作句の傍らよく柳誌を助けられ、『福寿草』という句集を発売された。あの有名な

福寿草松にしたがいそろかしこ

飲んでほしやめても欲しい酒をつぎ

ヒヤシンスの音沙汰でなしパンの事

と、主人路郎を激励された。

四男五女の家庭と雑誌没頭の夫君を助けて、川柳に燃やされた情熱は洵にまぶしく、後進の我等は幾度景仰したことだろう。

この度、八〇〇号を記念して、『旅人』、『福寿草』の夫婦句集が刊行されるにあたり、後世に残る名文中の名文『旅人』の自序

エスペラントのために一生を捧げたザメンホフ博士は偉らかった。ロシヤ文学の英訳に一生を捧げたマガレット夫人は偉らかった。くそ虫の研究に一生を捧げたアンリー・ファブルは偉らかった。何れも自分の夢を実現させた人達である。

そして川柳に一生を捧げた私は？ 私は云うべき言葉を知らない。

川柳の社会化運動と、一冊のこの句集。

私にも多くの夢がある。私の一生はまだピリオドを打たれていない。せめてそれを力ぐさに、歩き続けよう。

という立派な自序がある。

又、『福寿草』の序文は路郎が女流作家について委しく述べられている。

『川柳雑誌』の春泥抄に奥さんは毎月かかさず活躍されて、幾多の女流柳人

を養成しておられる。

毒は毒婦処女の桜ン坊

草に寝て今日もあしたも人間ぎらい

煙立ち立つ難波の街であつた筈

最後の一句は、時の特高の目にとまって反戦思想と言われ、府庁へ呼ばれたいきさつもあつた。路郎が古稀の時に

古稀はよし弟子に孫弟子ひまご弟子

という句を扇子にして、弟子達に下さつた。今や曾孫弟子ならぬ龜の孫、鶴の孫が沢山いるが、路郎・葎乃の両先生を知らぬ人が殆どである。

八〇〇号を機に、『旅人』、『福寿草』の佳句秀吟を今一度皆さんにお目にかけて、我等の柳祖を偲ぶも亦、故なきにあらざつとしてここに刊行した次第である。

西
尾
葉

旅
人

麻
生
路
郎

俺に似よ俺に似るなと子を思い

行末はどうあろうとも火の如し

春の僕ただ良寛をこころざす

だしぬけに鐘の鳴るのも旅のこと

しらじらしき悔みの淀まず

十二月首だけ入れて吞んで行く

豚の子へ続く豚の子ばかりなり

時計にまでうつる神経衰弱症

羊羹のすこしかたいも旧家らし

惚れられているとは知らぬ十三四

昼の風呂泳ぐ気にさえなる父よ

子にやった机で履歴かいている

子煩悩がったんがったんしてくらし

ある時は子をだんばしでくいとめる

資本家であつたは父の父の代

雑談の前にお布施がさらされる

君見たまえ蒨葎草が伸びている

不幸者喜劇役者とまではなり

天才へ親類あんなものと言ひ

ひる深し女の顔のながみじか

宿帳へ無職とかいた達筆さ

恋人の匂い香水だけでなし

結界の中へうけとる子煩惱

木の葉をくつつけ恋をむさぼる

これ以上には痩せられぬ、痩せられぬ

さあみんな降りてくれとお父さん

大杉を殺し思想を取り逃がし

吞ます気であるに資本家ののしられ

それから資本家吞ます事にきめ

さて吞むとなれば資本家先に酔い

若い燕切符を買って渡される

色硝子の向うであったことのように

あのダイヤもう芸人の指になし

逢いたかった逢いたかったと裾をふみ

悲しさがありあり浮いた洗面器

人妻とあまりに近い膝となり

藪医者というて居るとは子から聞き

大きなものにその影さえも奪われて

貫い子の方が芸者になるという

一ンち違いで二十円が死んでしまった

二階はさびしふと取りだして見る鏡

二階を降りてどこへ行く身ぞ

すべりんこ親は涼しいとこで待ち

見渡すとユダのころをみんな持ち

箱乗りもおんなじように眠くなり

襯衣一枚で書いた労働運動史

友達をみんなだまして南に居

腰が砕けたように娘の舞い納め

僕だけをおろして汽車は消えにけり

骨抜きにされた毒婦を諦めず

犬洗うことも仕事の浜の家

浜へ出りや隣のメリーさんも出る

孝行はいいが男がしなびて来

ポーナスで父の腕前疑うな

ひとりひとり雑誌をあたえ冬を越そ

大正天皇を悼み奉る

草莽の臣かなしみの炭をつぐ

まだ弟があるようにいう悔み聞き

だす入りの一つ欠けてもがたがたし

被^{きて}人のない帽子があるに気がつまり

学校の横に住みて

子を死なし学校に子の多いこと

儲けているうちは冗談ばかりいい

羊羹のこともめてる老夫婦

母と子の蚤が互いに入れかわり

一周忌その弟を泳がさず

一人子のどんな玩具も淋しくて

駈落に旅の花火の淋しゅうて

ロンドンの一周忌に

お父さんはやはり川柳々々と言ってるよ

お前がいたらと思ひ出すと煙草ばかり喫う

お父さんはネ覚東なくも生きている

日あたりのいいうちだが物足りなさに変りない

お父さんの神経衰弱がわかるかい

湯ざめするまでお前と話そ夢に来よ

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

戯れに死ねればこころやすからん

俺の子というのがあっておそろしく

凧あがりきって親子が口をきき

寒うおまんなアと芸者も年をとり

ひとり立てば風ふところに入りにつけり

無常とや猫も錦魚も死んで見せ

鯛焼けば鯛の臭いが残る也

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

お前達は畳の上の資本論

乳の出る機械に母はなっている

なすびもおばあさんも小さくなってゆく

秋さらり銀の襖のものおもい

嘘をまろめて書斎けうとし

その日ぐらしも軒に雀がこぼるるよ

歯が痛いそうかと亭主出てしまい

証文は要らぬしつかりやりたまえ

戯れについても淋し鐘の巾

鼻の偉大さ山脈を思わされ

淋しさは父の大きな鼻とねる

世の中を巡査になつてもてあまし

木像が動くと見えし大晦日

ひとりいればひとりは限りなくさびし

名をすてて十七八の恋もせむ

愚かにも顔見にゆけば雪になる

人妻よ不惑とはかなしくもあるかな

資本家はキャラクターまで買ったがり

機械の一部それが人間なんだとき

夕桜とんぼがえりがしてみたし

気違いじみた夫をまもり老けている

悪運つきず資本家の端

暴力はよしキリストも殺される

女中の子血の冷たさを思っている

獸人にあわただしきは春の雲

その話酒になつたで言い出さず

てにをはのあわぬ悔みとなりにつけり

きょうの父は聞いてくれそうにも思え

神経衰弱の死ではないことを書いて置く

他人らしくしたというのがもめのもと

女中ではございませんと言いたそう

凡人にいつちうれしい桜咲く

このごろはあっちにいと大きく出

素っぱだかわが亭主にしてみたし

いつまでも肉と葱との仲であれ

岐阜提灯の下で背広を脱がされる

弱点を握られていて二号にし

その嘘に女は縋りついてゆく

いのちがけで貰った妻の虚栄心

書齋はいいがいた事はなし

酒女酒で不惑に手がとどき

人並にいけるといふが酒のこと

寒がりがつまみ出してる黒の石

飲みに来いと言いい言いい春を留守にする

くびきりにまがうかたなき父の御名

大浜の丸万別館にて

三人が酔えば三人らしくなり

絹夜具の中で減俸案生れ

恋の罨あの眼だろうか眼だろうか

昼寝から海岸線がのびてゆく

文学を軽んじ馬で裾野ゆく

新町にて

生きとし生けるものの中に妓あり

古本屋でもやりますと帰りゆく

当選にバツタの姿思えかし

なあちろりこれから秋に親しもう

人妻のあまりに長き袂なる

酒とろりとろり大空のこころかも

医者が死を早めたことを誰が知ろ

十二月うれしい風も少し吹け

寄り添えと言わぬばかりに風が吹く

スピーチを考えながらテキを切り

少女で通すちははの前

踊ってたところが臨終とは知らず

灰をみつめて借金の嵩

首相逝く

待ったなしの歩にさされたる犬養毅

悼 五葉

薬湯の隅にひとりの君なりし

一一男アート危篤

汝の父はロック氏液をささげ立つ

とりまきをいっそ淋しいものに見る

家出と追手道頓堀で別に呑み

幻の中に時計が鳴っている

いつしかに母とおんなじ美顔水

腰が抜けた話を酒の肴にし

腰が立てばまだ富田屋の一の客

涼み船水の深さをききたがり

地方版の隅に小さく死んでいる

無くなると知ってもさらの傘を貸し

元旦だせめて眼鏡を拭きましよう

箸紙を書いた手でもう父は呑み

有限もよしとおもえり米の嵩

人並に女房も持った子も持った

そろばんの三桁四桁の人生か

時雨てる銀座に亀屋鶴五郎

洋室に松竹梅を持ちこまれ

その書棚酔いに乗じて買った本

嚴父慈母子に見せられぬ本もある

思案する膳に目刺が置かれたり

子を持って教科書に名を書いてやる

膳に左して子の頭子の頭

慶応にいますと家主子煩惱

奥さんと女将肝胆相照らし

十二月まがりくねったところで飲み

謹みて日の御子の御降誕を壽ぎ奉る

皇太子早くも春になし給い

子沢山僕の枕は何処へいた

燈火管制そこへ大きな月が出た

雲の峯相場の如く崩れたり

時計がとまったさびしさですよ僕にも

西部戦線わが童貞に異状なし

凡聖一如元旦のこころ知る

折靴麦酒を飲むに放さない

君の顔で僕の顔でと呑みにゆく

ひとりいれば蜘蛛の子にさえ気がうごく

老眼と知りそめし日を宮仕え

葉鶏頭昼の枕を胸へあて

赤心一票やりどころなし

人妻となつて卑怯な眼をつかい

金借りに来たのも連れて松竹座

この腕を見よと脱税していたり

媚薬の如く炬燵蒲団が眼に迫る

くちづけへお金はあした届けよう

二一・二六事変 二句

春寒し拾い手のない首二つ

身代りの緋緘ぐらい着てて欲し

我が世とぞ思う春にはならざりし

雨の松本にて

遠く来て信濃に山のない日なり

聖書一冊菊一輪の二階也

長男の顔と鼠の顔と似る

ラウンドガール父の酒癖思わされ

落人の刺身に箸もつけざりき

友達に別れた時がお元日

日ぐるまも兵を見送る如く也

総辞職犬も一緒に引き揚げる

総辞職再び松の風を聴き

本復をして辛辣な口をきき

のっぴきならぬこと計りなり五十一

思わざりき娘が二十四にもなり

春の艸代議士などに踏まれるな

奈良へ来て亡命に似し枕する

お互いの女房の話だけは避け

洋装もいいが畳へ椅子を置き

父の名を呼びすてにするまいごの子

幸福は金庫の中になかりけり

トランクはダークサイドも知っている

太を弾くその健康をみつめられ

おかしさは鯨の靴に豚の靴

金釘候文はまだ書けず

陳情に代表一人腰をかけ

豊葦原瑞穂の国の七分搦

残置燈女給馳のように消え

新郎新婦に捧ぐ

よしや道は遠くともふたり

アルミニウムかアハハと戎さん笑い

還暦もいいが家賃をまだ払い

小新聞の主筆にて候五ツ紋

気の弱いくせに鱗の帯をしめ

まああがれ女房の風呂は長いから

どの兵も後姿の父に似て

戦闘帽いよいよ長い顔となり

草の根よ僕も闘う草の根よ

看護婦となって仏印だよりかく

朗らかさ柔道着ほどつづくって

人柄が焼出されても足袋を履き

あの博士今度は民主主義を売り

題 聖徳太子之像

一ト握りああ人生は和に如かず

贅沢は百姓紺の匂させ

天皇を迎えて

お気の毒あれあれ帽子振りたまう

古くとも僕には仁義礼智信

黄菊白菊明治の匂なつかしむ

還曆 三句

六十一まだ情熱は燃えに燃え

六十一背広の旅をまだ続け

芳紀まさに六十一をほほえまん

牛老いて家族のようにいたわられ

握らせりや握る社党の浅間しさ

薄情な男眼鏡を拭くばかり

さて金となると友達甲斐もなく

嫁ですとひきあわされる松の内

薄情と言われうなづく薄情さ

ほほえめばほほえむ恋の川田順

くびきりへ今日は秋立つ日なりけり

青春を呑むべく生れ来し如し

蚊の中で父は漢書を手放さず

かんにんしてとキツス両手でふせがれる

椅子の背にもう青春が消えていた

未亡人子が月給をとりはじめ

往診の誤診を飯を食いながら

いつになく女の方が呑むという

颱風のあんな力が欲しくなり

白靴にその小胆さチラと見せ

愛人が雪の中の黒点となりぬ

ではここでなどと別れて飲み直し

斜陽族仏壇までが小さくなり

おしゃべりはきらいわが妻ならずとも

もう未練ないが糸屑とってやり

箸紙を書くに一本つけさせる

元日の卓上日記晴とだけ

お婆さんに限り死にたがり死にたがり

遺髪が戻り遺骨が戻り本人が戻る

苦の世界めし一椀をめぐまれし

水車小屋ここから隣村になり

病院の廊下財布のまま渡し

色事に疲れ糸切草を見る

未だ欲あり水晶の数珠

院長をもみくちやにする芸妓が居

父の咳節約しまつをせよと言う如し

別離わかれの言葉に深酒をしなさんな

組見の中の一人が嫁き遅れ

人類は悲しからずや左派と右派

啄木祭に

ああ僕も汽車を下りしにゆくところなし

お女将さんと言うてやるには少し若し

うんそうだそりあそうだとたかられる

出鱈目に生きて米寿もないものだ

人前はあんな女と言っておき

女のいない酒はさみしき

サルトルを伏せて女に溶け込みぬ

妖艶を愛しつづけて息を引く

女の訪問を特によろこぶ父でした

べんちやらのつもり放送聞きました

老妓とはさびしき名なり秋の夜の

飲むだけに芝居へ父もついて来る

悪筆をおしいただいた女将なり

ストをした顔もしないで年賀に来

文化祭美しいのは菊ばかり

ペン先をかえてしばらく煙草にし

うどんやでのんであの妓に逢いにゆき

遠慮している焼香をいそがされ

一年の第一日にプラン無く

雨の吉野にて

哀史聴くにふさわし吉野降りしきり

落人のように吉野は雨となり

晩年をまだ随筆に生きんとす

急逝を妓がいつち早く知り

山雨楼を悼む

オ、山雨楼と呼べば一ト筋のけむり

秋の風ここでも蔵に突当り

あの色気あれで養生してるのか

ムザムザと使える金が少し欲し

外人へパ。パの英語ははかどらず

あきらめて嫁^きたを無口と思ひ込み

文楽人形みな寒そうに寒そうに

商魂があるかと養子ためされる

足袋の新^さらだけだが僕に春が来た

サントリーで詩を談すのも春らしく

名が売れただけで淋しいことないか

梨里結婚

大安へ父も賛成しとくなり

女が下車おりたので岩波文庫読む

織田作の話で更ける水都祭

思い出の橋ばかりなり水都祭

水都祭まだこいさんが居そうなり

台風が外れただけでも人間はぽかんとす

爪弾きを聞いているのが金詰り

内閣が変りや君まで大臣か

風邪ひいて学者いよいよジジむさし

苦沙弥先生そつくりという父となり

文化勲章人間いやになる頃に

ワンマンカーやもめ暮らしに似ておかし

いつ死んでもいいと言うところまでは来た

民主主義いつまで金のない同士

南北氏を悼みて

宿替も今度は番地ないところ

古稀はよし弟子に孫弟子ひまご弟子

クイックスロークイックスロー古稀を華やかに

小料理屋女の匂だけでよし

葉牡丹のつかみどころなし哲人の如く

用を持って来てお大事にお大事に

不平も言わぬ妻だ長生きするならん

余所の奥さんを鑑賞してゐるうちに着き

横綱がもろいたとえになりそうだ

パンとミルクの食事へ記者を待たすなり

われ老いしか千代紙を美しと見る

朝新聞を見たら友人が死んでいた

初日の出自由はここにあるものを

凡人にとっては松竹梅もよし

奥信濃にて 三句

志賀高原ここが山賊平とか

奥信濃空気の味も味おうた

山と話そ霧のすがたもさまざまに

生み落とされて七十余年をウロチヨロす

貧乏だけとおちつきだけは失わず

第二の天性か女はマツチ摺る

時計が一つ鳴った役目を果たすよう

不幸にも気も狂わずに首相いる

妻よ踊れ残んの色香ほのぼのと

選挙

血を売る男一票も売り

おじいさんもう元旦の咳をする

黙秘権の行使ではなし老夫婦

道後温泉にて 二句

坊ちゃんは一脈通じる湯にひたり

道後の湯黙禅さんへ会釈する

昔とは父母のいませし頃を言い

台風一過今日は法事で忙しく

塀に沿うて歩く姿も尼僧なり

デザイナーの間違ったのがはやり出し

李白という友あり遠きむかしにも

自分すら救えぬ人の立候補

老人におもちゃなしバラの前に立つ

健保の医者へのいお次ぎへいお次ぎ

一行詩これが私の墓だとは

十和田湖よみな酒になれ旅人へ

甲子園へ出たと言うのが会社に居

土地が沈むとよ平気でいる庶民

地蔵盆恋の手習いするもよし

錆びついた針のようでも生きんとす

城下町酒うる家をなつかしむ

黙ってはいても化石に候わず

俺だ俺だよと銅像言いたそう

人相も肝腎や蜘蛛殺される

蜘蛛の糸でも妻はわたしにすがりつく

この恋もフォアボールに終りたり

奥さんになやまされまだ重役室に居る

金婚に見馴れた顔もうれしけれ

振りむけばやっぱりついて来る妻よ

地球あわただしく揺れる淋しさ蒼く黄色く

敷かれてやるひまもなかりしに金婚か

地下センター幻の如く人がゆく

山と河人ひとりなき舞台なる

雑木林を通り抜け俗事へ戻って来

老いらくの恋が土筆をふみにじり

小杉放庵逝く

星が流れたあれは放庵だったのか

ガガーリンと握手した日もあつたけど

鍵ッ子だったからか虫けらに魅力

台風と学者相撲にならなんだ

台風も聖火も通りゃことわれず

恋という字を老人凝視する

学生長髪問題で騒ぐ

長髪もよからん神武の末裔さ

定年後遇えば酒までやめている

捨てること何んでもないと思ひしに

三月三十一日入院 二句

淋しがりやのボクを個室に放りこんだ

部分品がもうおまへんと言われそう

人生を暗いところで探りあて

しがみつくほどのこの世でなかりけり

五月十四日ひとまず退院

車いすあの看護婦も若かった

炎の中に忘の字が灰となって残り

死はゆらぐ文楽人形に死はゆらぐ

死の影が紋十郎の背後うしろから

トンホリが消えゆくか

道頓堀メロンが腐ったなげきなり

いつのほどにかブックエンドに似てわれも

臨終が冬なら “いろはおくり” で逝かんかな

辞世

雲の峯という手もありさらばさらばです

福
寿
草

麻
生
葭
乃

十七字我等の国語なるぞかし

初日キラキラ 網は殺生忘れてる

数の子のみんな育てばすごかろう

松の内ダークサイドのない飲手

福寿草松にしたがいそろかしこ

松竹梅松は母家という形

節約の床葉牡丹が活けられる

松の内まだ一軒を飲み残し

返信でくだ巻きかえす飲仲間

三ヶ日爛番をしただけのこと

屠蘇機嫌らしい追補のある賀状

飲むほどにもう初雪のかけもなし

初風呂へ冬の姿で来て目立ち

門松は無用常住座臥の門

散髪屋すぐにもかかるように言い

剃りに来て意外にうつる襟と知れ

記念品社名れいれいしくきざみ

秋ざくらあまりに堅きペン皿や

コスモスに風あり友の書齋見ゆ

牡鶏が来て鶏頭のまぎらわし

ちよぼちよぼちよぼちよぼちよぼちよぼと咲く女郎花

揚花火散つた姿の曼珠沙華

尺あてて見れば暴君揃いなり

言いまけて又鏡台へ向きなおり

飲んでほし やめても欲しい酒をつぎ

お帰りにならず 刺身も色かわる

夕立は小気味よし 君が叱咤も

相談をしてひとしなをはぶく膳

気を変えて雲は東へ流れ出し

雀来よ来よと 伸びる屋根の草

池に鶴残して一家都落ち

住吉の馬と生れず馬力曳く

信心の茶店かしわのすきもあり

幕の内 一寸 はさめばくずれそう

鐘がひびかぬ大都会の淋しさよ

別府染とうとう縫わず夏がすぎ

しみじみと心培う部屋もなし

一生に自分の部屋というが欲し

墓口も襟も子供の払い下げ

「HEALTH」見てまだ生きのびる欲を出し

生きることにはきめて頑固を立てとおし

われ充てり 充てりと 裏の菜種咲く

葱畑みなくすだまをさし上げて

内なりという瓜もみのほろにがく

手をのべた袖の下にもつくつくし

片便り彼岸桜が淋しゅうて

糸瓜もう水をとられる風と知り

へちま へちま ここは行水するところ

帆立貝人手貝など子に教え

児を寝かしてからの天下を寝てしまい

夕桜ここが終いの法界屋

出語りがあるかと思う桜の灯

花の留守あてがいぶちの酒に酔い

鳳仙花竿の雫のかかるところ

錦魚草プチブルとまでゆかぬ庭

浴槽へずらり立ったは皆わが子

木綿着の心安きよ子と眠る

子を置いて朝湯へ来るも五年ぶり

長女だけ母のさばきが気に入らず

指図するだけのマダムの土いじり

子が出来て床の飾となった琴

若く言えば帽子を脱いで見せるなり

百姓のゆっくり返事書くときめ

吝嗇の家に残したつばめの巢

愚痴を聞くまも忙しい四本針

パトロンへひきめ感じる兄を連れ

パトロンへ妹の靴もたのんどき

母は来ずたのんだ梅の壺も来ず

夜ふかしも朝寝も父にまけじとす

苺は毒婦 処女の桜ン坊

御随意に座蒲団敷いて貫う客

園丁とおもてか猫がつきまとう

箸うごく通りに猫の首動き

改札を出るも先駆者たらんとす

鬱憤は空へ消えるか巻たばこ

脱稿は近し煙草はもうしまい

金の奴隸の奴隸となつて御寮人

貯金箱またひき潮となりはじめ

信心の寺は昼寝によいところ

夕立が晴れてお寺の冷やつこ

懐が寒くなつての純喫茶

片意地な親子だまつて膳につき

あぶなげなお世辞。ピョ。ピョ。ひよこの毛

柄にないお世辞は的をはずしたり

まけ方は二銭三銭丁稚らし

あれも又数の中なるウエートレス

マドロスの気で出張の夜を歩き

女将から鱻と呼ばれて気に入られ

忘れもの届いて吞んだ順が知れ

ラブレターの嘘に女神と書きにけり

心ブラを貸ある女将めざとく見

袖はねて紙幣さが出そうもないマント

梯子酒妻へはにぎり通しとき

男の世界覗く眼鏡はこちらです

あかしばなそのまま朝の酒となり

朝酒にほのぼの海が白らみたり

せいのない相槌ながら愚痴を聞く

交渉に邪魔な正直者を連れ

植木屋の隣へ住んで少し植え

紫の粉が散れ 粉が散れ 揚雲雀

揚雲雀　わが魂を持って行け

眠るよりほかに浄土の地をば見ず

君の青私の青と違ふなり

ものぐさは猫におとらず火を囲む

そも何のうれいぞ海の鉛色

昼の風呂いつそあひるで居りましよか

まああんな瘦ぎしもいる土俵入

極大で握る火事場の握りめし

牡丹雪櫓太鼓が鳴りそうな

すだれ巻き揚げても暑い大阪市

大根畑へ紋白蝶が降って来た

不景気にかかる人出を憤り

縞鯛はキング真鯛はクインにて

盃蘭盆の風にながれて来た蜻蛉

こおろぎよ私も蚊帳で起きている

行末はハムとなる声のどかにて

娘まだ帯へ縫込む智慧も出ず

未亡人その冗談へむきになり

夫人夫人と言われ個性のないくらし

花粉に酔えり浅はかなることよ

今日の私の心に嵐立ちそびれ

無言の祈り十字架のいや高し

魂の創世記はこれからですの

山を移す信仰に生きんかな

サンデー晴　五女はバイブル持って出る

虫を殺してる人ばかりだろうか　吊革を持つ

風に靡く柳ではござんせぬ

此癖を捨てたら形見何もなし

曲げぬところが私のまこと　あなたへのプレゼント

空見れば空に葉刈の音がして

別館を建て増しつつじ真盛り

仏壇の埃を意見して帰り

産めよ殖えよ 地に充てよと 囀るよ

籠の鳥諦めたのか 空を見ず

ワンステップのテンポで茶碗洗うかな

桜漬山々霞むかと覚え

夕焼を残して雀寝しずまり

峰の雪旅立つ心そぞろなり

子を捕られた雀 けろりと樋から出

群雀なかの一羽がタクト振る

午前九時出頭すれば刑事居ず

やがてトンネル 百姓が小さく見え

案山子かと思れば煙草を喫い出した

誘惑の灯をタクシーで見て通り

花の寺酔えば祈願の身も忘れ

合シヨールさえも重たい花疲れ

宙を浮く思いフェルトで逢いに行き

十合 大丸 帯一本にくたびれる

デパートを出たら灯もつき雨も降り

ニユールックあれが長屋を出た姿

貝細工其の日暮しの手にぬられ

雛の画に題して

ひな壇の蛤沖が恋しかろう

明けきらぬ部屋に真白き雛の顔

五人ばやし富樫に似てるのも交じり

月見草 一番星が出はじめた

蓼そえて一層涼しい鮎の皿

地下鉄へ出よとしたのに地下売場

さくらん坊頸の細さに似る乙女

水と油何を好んで和睦せん

本売った事も苦学の中へ入れ

古本屋自論を吐いて売りつける

読むだけの客と見ぬいた古本屋

古本屋不承不精に値を申し

初午に社員総出と言う会社

貸浴衣着るがはやいか肩をぬぎ

七光だと婦人記者思えども

とつときの文句でほめる婦人記者

いけすかない仲居も生きる姿にて

煙みななびいて都市を威圧する

売れ残りらしい小鯛をまだまけず

鬼灯と見しは束の間の錦魚

錦魚二匹あと追うて行く姿也

曼珠沙華子の命日に毒々し

こおろぎよ今年は一人たらぬ蚊帳

腰掛は瀬戸か伊万里か藤の下

消える虹なれば尊く美しく

船旅の嵐も海の魅力にて

月おぼろ君の情に似ておぼろ

おごらねばならぬ封書をとりつがれ

岸の里の新居にて

窓を開けても六甲は見えず

山を見ずこのヒヤシンスあれば足る

鬼あざみ無縁の墓を淋しゆうす

嘘嘘嘘 木魚の音もそうひびく

風鈴屋汗かく荷とは思われず

貸浴衣足四五寸も出る息子

パラソルをたたんで歩く藪の風

晩酌の膝を飼猫見逃さず

約束をあぶながらられる程に呑み

谷川の音が床下くぐる宿

悪人へ陽は燦々と惜しみなく

法科出も何の要なき部屋住い

ヒヤシンスの音沙汰でなしパンの事

貧しき家に天寿全うする草よ

野の百合を見よと予算のないくらし

種子蒔いているなと屋根の雀ども

小町草袂の柄をぬけて来て

さらばさらばと散るはずかけ

うどん屋の酒は足から醒めそうな

ようように松の梢へさわる月

鶴の間の几帳のかけはなおくらく

妹の方が手なれたきゅうりもみ

金は及ばぬ山の霊気や

囀りが籠にこぼるるばかりなり

蜃気楼と思え財布も人も樹も

ウインドへみとれる妻をほって行き

スフにしてあとは梯子で消える金

番付を見なおす今の愁歎場

スリーカップス オフ ワイン 悩みことなるくちにふれ

電線から落ちる雫もあとやさき

世は進化せりああ傀儡となりし我等

子等は星　月は冷えゆくものと知れ

振向けば君も小さい並木路

なつかしの故郷を翼の下に見て

ポプラの葉風に一揆を起すよう

小金あり梅干す事で夫婦もめ

浜ひるがお蝶々は低う低うとび

菜の花はあの屋根のはて屋根のはて

後樂園にて

この辺に野だての釜の欲しい芝

鉄瓶をおろして雨の音と知る

奪い合うていっちな下手なが炭をつぎ

爛瓶を射通す櫛の火を見つめ

ルビー―サファイヤ花のしめりに及ぶべき

其の姿 虹も立つならめかしましよ

鎧戸は開かず朝霧せまる家

薄情な男となって鹿島立ち

中山の人出へ匂うこぼれ梅

中山へ帯も返さぬ倦怠期

因襲脱し難きビルの鳥居よ

袖張つて海が見えたか奴いか

お彼岸の亀にも無沙汰してる也

一心寺の墓に隠れて帰る也

無念無想どころかせわし一心寺

睡蓮も咲き証文も要る世也

朝の蚊帳流れ出すかと思われる

初蚊帳の中はシャツ着たキリギリス

グライダー見学

蜻蛉までみがるな盾津草の上

もう秋の雲が出だしたなんばきび

茅屋をお静かですと賞められた

チ、チ、チ、チ、殺す場面となる虫か

すず虫はこれか淋しや昼の籠

風さつとすすきの虫をだまらせた

虫しげきまま朝となる物案じ

露を呑んでいたし松虫のように

金箔の眩惑も見ゆ南無阿弥陀

女の子揃えの柄が気に入らず

おぼっちゃんだわと見合をした所感

良縁をことわる訳を知る妹

ほそぼそと湯屋の煙のひるひなか

叩かれて背広つまずきそうに行き

団服の手前マルタマ素通りし

モーニング ピアノへ立っていと細し

ああ 金がでつちあげたる声かそも

老眼をかけて文句のてきびしさ

事務多忙一輪挿しも邪魔がられ

歩と角と飛車と桂馬の子をば持ち

臍くりの伝授に永居して帰り

かこちつつなげきつつ喫う巻たばこ

豆腐屋は虹の出ているのも知らず

お美事といわれ苦しい酒を呑み

発心の桜淋しい色となり

水仙白く われをいましむ

お達者なことよ蘇鉄がよみがえり

一心寺にて

骨仏みな成仏をした人か

人生を霞と見てる親がかり

母の三十三回忌に父逝く

父と母同じはちすを疑わず

今ぞ知るかたくなな父慈悲の父

死出の旅にも日本酒位あるかしら

亡き父を思う

父はあらず壁ばかりなる父の部屋

夢に來た父はゆもじの夏姿

長男ロンドンを喪いて

弟へ残す形見のかたボール

ロンドンの一周忌

まぼろしであつたか死んだ兎の裸

一周忌かしこもこも草萌ゆる

一周忌こんな蒲団で寝ていたか

紺絣　今はアートのために裁つ

香を焚いてまぎるる事も凡夫なる

母君を喪い給える生々庵氏に

ただ弥陀にすがれと珠数を残されし

落下傘敵に見られなさとりれな

南進日本さても墳墓の地の多き

煙立ち立つ難波の街であつた筈

第一便二便もバナナ食うたより

猫 今日もお粥のしずくだけ貰い

第二疎開地 伊賀 上野市

開墾の畠は一里さきの山

盗み手はないが烏が食う畑

第三疎開地 大和 宇陀川のほとり

崖上の窓へ自転車から話し

ややあつて雷峰を替えて鳴り

終戦後の大阪にて

焼跡は豊作茄子も花ざかり

疎開地へ浅黄の空を置いて来た

眼覚めても雀の鳴かぬ窓に居る

十二神將チヨンと木頭ひびきそう

角伐りは夕日をうけてくたびれる

今鳴いた鳥はどの枝依水園

十八間戸素性あかさぬ人も居る

十八間戸ヨルダン川はないけれど

粕桶へかっぱと伏した瓜と瓜

奈良人形糊ききすぎた袖を張り

夕靄に仮駕二挺三輪へつき

多武峯

拝殿も桜も燃える中へ来て

見下せば大和三山跨げそう

聞いて来た滝は身のたけほどにして

墓に水かけに 海越え山を越え

あとがき この句集の「旅人」は、川柳全集2『麻生路郎』（構造社）として橘高薫風が収録した400句を、また、「福寿草」は、麻生葭乃句集『福寿草』から橘高薫風が抜粋した300句を収録した。

今回の編集にあたっては、原則として仮名遣いを「現代仮名遣い」に改め、字体も「新字体」として表記を統一し、現代の読者に読みやすい新訂版とした。 （田中正坊）

平成6年1月16日発行

旅 人 福寿草 夫婦句集

定価 1,500円

発行所 川 柳 塔 社

〒545 大阪市阿倍野区三明町2-10-16

ウエムラ第2ビル202号室

電話 (06) 6 2 9 - 6 9 1 4

美研アート 印刷



川
柳
塔
社